

【対談】

ととも 男女に奏でる しごととくらしのハーモニー

やまだけいじ
山田啓二（京都府知事）

うちだなおり
内田奈織（ハープ奏者）

ジェフ・バーグランド（京都外国語大学教授）



■ 男女共同参画基本法施行から10年 京都府男女共同参画推進条例施行から5年

（ジェフ）男性も女性も社会の中で自分の力を発揮する、自分の夢に向かってその夢を実現するための活躍をするというのは当たり前なことなのですが、今年は、男女共同参画基本法ができて10年、それから京都府として男女共同参画推進条例が施行されてちょうど5年という節目の年なんですね。そこで知事さんに、全体の男女共同参画社会に向けての取り組み、それから考え方を聞かせてほしいなと思います。

（知事）そうですね。「男女共同参画」と最初聞いた時、とても堅い言葉が出てきたなという印象がありましたけれども、少しずつ定着してきましたね。今、お話がありましたように、法律や京都府でも条例、また仕事の方では男女雇用機会均等法ができ、かつての女性政策課が男女共同参画課に変わり、女性の社会進出や女性の地域における役割などを闘っていた時代から、まだまだなんでしょうけ

れども、男女のハーモニーへと移り変わっています。枠組みは大分良くなったのですが、育児休業などは男性も取れる枠組みはできたけれども、京都府で、去年育児休業を取った男性は、ゼロなのです。

（ジェフ）制度ができてても周りの理解がまだまだないという、そういう現状なんですか。

（知事）ようやく器はできてきたけれども、中に入れるものというのがこれからということじゃないかと思っています。

（ジェフ）しかし、男女雇用機会均等法ができた一番最初の年には、女性が窓口続々と相談に来るだろうという考え方だったのですが、実は一番たくさん来たのは男性だったんですね。これはなぜかという、男性も育児休暇を取りたい、男性ももっと子育てに参加したい、今まで女性しかやっていなかったところを自分もやりたいということでした。均等法で守られているという気持ちがあって、解放されたというんでしょうか。ですから、去年は育児休業取得男性はゼロですが、器ができて、これから増えていくのではないですか。

（知事）もう着実に芽は出てきています。「子育てパパの会」がいろいろなところでできており、10年前とはぜんぜん違う形になってきたのではないかと思います。まだやはり残っている部分、きれい事ではすまない部分というのがあるんじゃないかなと思います。

（ジェフ）先程の知事さんのお話の中には、

「男女共同参画社会という言葉が定着した」と。しかし、定着したと言われている内側には、まだ実現になっていないんですよ。

(知事) その言葉を意識しなくてもいいような時代にならないといけない。

(ジェフ) そういう社会になったら、その言葉も要らないぐらいなんですが、内田さんはいかがですか。男女共同参画基本法ができて10年、条例ができて5年、ご自分が女性としてこの社会で活躍する中で、どうお感じになりますか。

(内田) やはり先程仰ったように、最初は女性の政策課とか女性の社会進出とか、「出て行く」ということだったのですが、今はハーモニーへと移り変わって来ました。ハーモニーは先程の音楽もそうなのですが、どの音が一つ欠けてもいけないんです。そして、それぞれの音の、例えば三つ、五つ、八つで構成される一つの和音、バランスが一番良い時に、同じ弾き方でも一番豊かな和音、ハーモニーが響きます。やはり「どちらかが」ではなく、それぞれみんなで創り上げていく。私のハープの弦で言えば、そういう様にハーモニーを奏でる事が大切です。

(ジェフ) しかし、このハーモニーを実現させるためには一人ひとりの活躍が大事です。

このフェスティバルの午後からは、ワークショップが20程予定されているのですが、それぞれ地域の中で活躍されていることが非常に目立ちますね。いわゆる男女共同参画社会を実現するためには、それぞれの地域の中での皆さんの活躍が非常に大事だということです。地域の中で活躍されているといいますと、内田さんは、ご自分の住んでおられる宇治田原町を拠点に、人と人、特に小学校、中学校の皆さんとの繋がりを大切に地域活動をされています。そういう活動を、皆さんにちょっと紹介していただけますか。

■地域活動における男女共同参画

(内田) 私は宇治田原町在住で、そこを拠点にして、京都府教育委員会からの派遣で府内のいろいろな小学校に「夢大使こころのせんせい」



として回らせていただいています。山城地域のお隣の町の学校にも。しかし、やはり地元の宇治田原の自分が卒業した小学校に伺ったこと、それがこの夢大使活動に参加する一番最初だったんです。

(ジェフ) 内田さん自身は、ハーブを始められたのは、小学校へ通っていた頃でしょうか。演奏会に出られて、ハーブに興味を持たれたのですか。

(内田) 始めたのは小学校の5年生で、ピアノの先生のお宅で、ちょっとだけハーブを触らせていただいたんです。そこで魔法にかかったような気がして、ハーブがやりたいと思って、始めました。

(知事) 内田さん、ハーブを弾く方は、男性と女性の割合はどのくらいですか。

(内田) 「男性のハーブの方はいらっしゃるんですか？」という質問は大変多いのです。日本にハーブを持ち込まれた昔の先生や、実力のある先生には男性もいらっしゃるんですけども、こういう現場で、コンサート活動で弾いているのは、なぜか女性が多いのです。ヨーロッパの伝統ある有名なオーケストラでは、やはり男性が楽団員という伝統が非常に強いらしいのです。でも、その男性社会一辺倒だったヨーロッパのオーケストラに最初に就職したのは、やはり女性のハーブ奏者だったということは聞いております。

(ジェフ) 内田さんはハーブだけではなくて、盲導犬の啓発活動もやっていたらっしゃるんで

しょう。

(内田) はい。地域の小学校に伺って、自分の軸となるものをやはりいつも感じています。先程のハーモニーと同じで、男性も女性も家族も両親も一人でも欠けていたら、今日こうしてハーブを弾いていなかったと思うので、私にできることは一歩外に出て、盲導犬の普及活動をコンサートでお喋りしたりということなんです。いろいろな法律ができたといっても、やはりまだ食事の場面などで断られたりすることが多いとユーザーの方も仰っていますので。

(ジェフ) そうですね。先程の男女共同参画基本法や条例など、その器ができて、まだ皆さんの意識の問題があるんですね。皆さん、それぞれ地域の中で非常に多様な活動をなさっているんですが、男女共同参画社会に向けて、京都府としてどういう取り組みといますか、どういうバックアップをなさっているかというのを、知事さんにお伺いしたいのですが。

(知事) バックアップというよりはですね、本当に女性の皆さんが自然に頑張っている状況が今、どんどん生まれていると思います。



戦後の日本では、とにかく働いて生活をとる状況でした。ですから、ひたすら会社で働くという事をずっとやってきて、世界でGDPでは2位という大変豊かな国になりました。しかし、現在は、地域での人の絆が薄れてしまっていますし、戦後の日本社会を支えていた団塊の世代という人たちが、これから次のセカンドライフということを考えていけない時代。また、日本自身もたくさん工業製品を作っていた時代から、今はそ

ういったものは人件費の関係もあって、中国やインドの方がどんどん強くなってしまいましたので、いろいろ多種多様なものを作り上げていかなければいけない。それぞれの個性や資源を活かしていかなければならない時代になったわけですね。個性や資源を活かす段階というのは地域の時代になった。「地方分権」という言葉がどこでも言われるようになった一つの大きな原因だと思うんです。その時に、地域を愛して、地域ですっと頑張ってきたのはやはり女性なんですね。そして、児童虐待が増えたり、犯罪が増えていったりと、いろんな問題が起きてくる中で、もう一度、心豊かな、人と人が繋がった地域社会をつくろうと思った時に、女性の活動がたくさん出てきたわけです。私たちはそれを「地域力再生活動」と呼んでいます。もう一度地域力をつくりましょう、再生しましょうという活動をする、やはり主役は圧倒的に女性なんですね。女性が主役として出てくることによって、今度は男性が引っ張られてくる場合がある。舞鶴の伊庭（節子）さんのところでは、「肉じゃが」で地域力再生活動をやっていたらしゃるんですけども、「肉じゃが」を広めていく中で様々な活動をやっていくと、そこへ男性が加わってくる。そういう動きが地域力の中ですごく出てきているんです。先程ジェフさんが仰ったように、男性も育児休業を取りたい、男性も地域に入っていきたい。興味を持つんだけど、どうやって入ってよいかわからない。ところが、女性が主役になって引っ張っていくと、そこに男性がついてくる。今までと違った男女共同参画のハーモニーが、その地域力再生の中でいっぱい出てきているんです。

(ジェフ) 一つの
良い例として、先
程の宇治市消防団
あさぎり分団の皆
さん(平成21年
度あけぼの賞受賞



者)は、「女性のネットワーク」という言葉
を使っておられたのですが、異文化コミュニ
ケーションで言うと、「男性型コミュニケー
ション」と「女性型コミュニケーション」が
あって、もちろん女性はみんな女性型コミュニ
ケーション、男性はみんな男性型コミュニ
ケーションをとるわけではないんですが、大
きく言うと、ちょっとコミュニケーションの
スタイルが違う。男性の方の口癖というのは、
「そやけど」。「そやけど」というのは自分
と相手は違うんだという、人から自分を離し
て人を見るのが、男性のコミュニケーション
の基本。それに対して女性の口癖は、「そや
な」。相手との繋がりを非常に大切にする。
それがこのネットワーク作りに非常に役に立
つ。ですから異文化コミュニケーション学会
の中では、歴史的にネットワーク作りは女性
の方が向いていると。ただ、今の時代とい
うのは、どんどん男性と女性の役割から来
た、型にはまったようなコミュニケーションの
取り方もそうですし、どんな仕事をするのか、
どんな夢に向かっていくのかというのも、男
性は男性、女性は女性ではなくて、ハーモ
ニーの中でそれぞれの人間として、今日のテ
ーマにあります、まさに「男女に育む 京都の
知恵と力」なんですね。

(知事) ジェフさん、今、コラボ博覧会をや
っているのですが、この3年間だけでもう
1,000以上の地域力再生活動の事業が京
都の中で生まれていて、本当にネットワーク
が広がっているんです。この中にもたくさ
んいらっしゃると思います。そうしたものを今、

博覧会という形でやっています、これを観
ていただくと、まさに「コラボ」なんですね。
そこにはもう地域の中における年代を超えた
コラボ、男女を超えたコラボ、そして、地域
を超えたコラボ、そうしたものが今、行われ
ているんです。いろいろな所でコラボ博覧会
をやっていますし、特にみんなで一緒に体感
をしよう、というコラボツアーリストもやっ
ていますので、御参加いただければ、やはり京
都は変わってきているんだな、その芽がどん
どん地域から生まれているんだな、というこ
とをわかってもらえると思います。

(内田) 今仰ったように、地域って一番身近
な所ですし、普通にいろいろなことをしてい
ると自然にハーモニーが出てくるという感じ
なんですよ。男女に限らず、得意な事とか、
好きな事をみんながそれぞれいろいろな思い
を込めてやっていけばいいのではないかと思
います。私も演奏の時に思うのですが、今日
のように一人で弾いている時と、楽団やアン
サンブルの一員で弾く時というのはちょっと
違うスタンスなんですね。今日、一人で演奏
したような時にできること、また、例えば5
0人とか、70人とか、そういう大きな力
の中では何人分の1かもしれないけれども、そ
こで自分のできる事など、それぞれの役目を
悔いのないようにやれば、みんなの力がすご
く大きくなって、一人ではできない大きなパ
ワーをみんなで作ることができるのじゃな
いかな、と日々感じているところです。

(ジェフ) 先程、私はあさぎり分団の皆さん
の活躍を共同参画社会の中での地域再生の活
動として例をあげたのですが、やはり今、内
田さんが仰ったように、自分の地域の中で、
例えば自分の家族を守りたい、自分のすぐ近
くに住んでいるお祖父ちゃん、お祖母ちゃん
を守りたい。その気持ちから消防団という団
体の中で、その地域に住んでいる例えば高齢

者が独り住まいだと、どこの部屋で寝ているか、夜に災害とか、火事があった時には助けに入るために、どういふことをしたらいいのかというように、皆さんが一緒になって活躍すると、一人が発揮できる力よりも、随分その力が大きくなっていくんですよね。しかし、一つ問題になってくるのが、男性も女性も両方とも同じ問題を抱えているのですが、いろいろな自分の才能、力というものがある。発揮する場所が仕事であったり、家庭であったり、この仕事と家庭、仕事と自分のプライベートライフというのでしょうか、このバランスが非常に取りにくくなっているのではないかと思うんです。知事さん自身が皆さんに訴えているテーマ「ライフとワークのバランス」、これに向けて皆さんがお悩みをいろいろと抱えていると思いますので、京都府として、どういふ取り組みを今までされてきて、これからどうなっていくのかという点について、知事いかがですか。

■ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて

(知事) 今まではどちらかという、女性の働く環境を整えるということをやってきました。育児休業や産休、保育所の整備など、まだまだやらなければいけないのですが、子育てステーションのような形で、働く人たち、特に働く女性の環境を整えていくということをやってきて、問題はそれだけではないと感じています。実は今、育児で問題となっているのが、育児に対する不安感、不満を持っておられる方というのは子育て専門の、つまり仕事に行かれていない専業主婦で3歳までの子育てをしている方が一番不安感が強いんですね。それは社会との繋がりが無い。繋がりがなく、子どもと向かい合っている中で、男

性の理解がなかったりする。その中でやはり孤独感・孤立感を感じ、そういった方々が繋がりを持って地域でもう一回、子育てを共有できるようなものもつくっていかねばなりません。

(ジェフ) お母様方だけではなく、少子化で子どもも一人しかいないという場合が多いので、子どもが他の子どもと出会うこともないですね。

(知事) 出会う場所もつくっていく必要があります。

(ジェフ) 子育て中の親と子どもが一緒になったら一番良いですね。

(知事) トータルにですね。今まではどちらかという、「仕事と環境」という様に考えていたのですが、やはりトータルな生活の繋がりが、充足感というものを満たすことによって初めて、「ライフ・アンド・ワーク」が機能していく、という時代が変わっているような気がするのです。

(ジェフ) 内田さん自身も日本国内、それから海外と非常に忙しい演奏家ですよね。他にもいろいろと小学校や中学校へ行ったり、いわゆる自分の仕事の面が非常に大きなウェイトを占めていますね。先程のハーブのきれいな音を聞いていましたら、朝から晩まで演奏、仕事のない時は練習されているのじゃないかなと思うのですが。

(内田) そうですね。私の場合は幸い、このハーブを弾くのが私に与えられた仕事であって、たまたまこれが一番好きなことなんです。そのために、確かに仰るように一日中、今日も帰って次の練習やいろいろな準備をしようとか思っているところです。

(ジェフ) その練習は何の苦もならないんですね、好きなことですから。

(内田) 今のところはそうですね。練習しないことには自分がハーブをちゃんと弾けない

ので、小学校の頃から当たり前のことになっているんです。でも、会社などに毎日行かれてパソコンに向かわれて、いろいろな会議などをたくさんなさってお仕事されている方は、どうやって気分転換をしたり、バランスをとっておられるのだろうか、と気になっております。

(ジェフ) 私の場合は、非常に忙しいのですが、内田さんと同じように自分の好きなことを仕事のない時にやります。僕の趣味は掃除で、小さい頃から拭いたり、電気掃除機を使ったりする事が、すごく好きだったんです。僕は京都に住んでちょうど40年になるんですが、日本に来た頃は男性が掃除をするのは、男性らしくないと言われました。しかし、夫婦が相談事をするテレビ番組で、藤本義一さんがこう仰ったのです。『ラグビーをしていて鉄工所で働いている。掃除が好きだけど、それは男らしくない。奥さんが会社社長で自分の40倍の給料をもらって、家では奥さんが「おい、おい」と言って自分が動く。それが悩みだ。』と言う相談者の男性に、藤本さんが『男が好きなことをやって何が悪いんだ。』と。私も子どもの頃から掃除が好きだったので、やってもいいんじゃないかと思ったのです。それ以降、生活が楽しいんです。毎日、掃除に皿洗い。

(知事) すごくいいと思います。やはりそれぞれのペースがありますが、私の家は逆で、パートナーが本当に掃除好きなのです。私はどちらかというと、旅行に行く時でも、時間が気になってサッと出ようとするタイプで、帰ってから片づければいいんじゃないかと思うのですが、私のパートナーは片づけてからでないと出られない。私は、時間を見て焦りますが、向こうは片づけてからでないと出られないから、お互いの間でいつもギリギリの選択が行われるわけですよ。

(ジェフ) ですから、内田さんが先程ハーモニーと言ったのは、それぞれの弦には役割があって、それから自分が一人で演奏する時と、他の方と一緒に調和をとりながらという、いろいろなハーモニーがあるということなのです。知事さんは知事さんなりに奥様とハーモニーをとりながら、私は私なりに自分の妻とハーモニーをとりながら結婚生活を送っているのですが、問題は、社会の中でそうやって自分のペースというんですか、自分の夢の実現に向かって自分が力を発揮できる社会にはまだなっていないんじゃないでしょうか。

■男女共同参画社会の将来を考える指標

(知事) ちょっと今、心配な点がありまして、何かと申しますと、「生涯未婚率」。結婚するしないは個人の自由なのですが、それが大きく変化しているのです。30年前ぐらいは、女性で結婚しない人は4.32パーセント、25人に1人ぐらい。男性では2.12パーセント、50人に1人ぐらいだった。

(ジェフ) 非常に低い。

(知事) 本当は1対1にならないとおかしいんですが、男性の未婚率が女性の半分だったんですね。それが、ちょうど20年前に一致するんです。男性の未婚率と女性の未婚率が一致して、ここでちょうどいいのかなと思うのですが、ここから先が恐ろしいことになっていまして、資料が2005年までしかないのですが、ちょうど20年前に4パーセントだったのが、10年ほど前には男性の未婚率が約9パーセントになるんですね。

(ジェフ) 男性は非常に増えているんですね。

(知事) そこから10年経つとどうなるか。15.96パーセント。6人に1人。おそらく今、20パーセントを超えているのではないのでしょうか。女性の未婚率も増えているん

ですが、それでも7.25パーセント。はっきり言えば、女性が男性を厳しく選んでいるということですね。ですから、2割ぐらいの男性は結婚できなくなっている。もう一つ気掛かりな数字があるのですが、高齢化時代の中、京都府では80歳を超えている方は、女性が約10万人、男性が約4.7万人。さらに100歳を超えている方は今、京都で約1,000人いらっしゃるんです。そのうち男性は何人ぐらいだと思いますか。

(ジェフ) 少ないのでしょうか。

(知事) 100歳以上が1,000人いて、男性は142名、女性は889名です。ハーモニーは大丈夫でしょうか。結局、もう社会が変わっているんです。明らかに女性が選択し、女性が生き残る社会へと。

(ジェフ) 異文化コミュニケーションの中で、もともと一夫一婦制というのは、男性を結婚させるための制度だったんです。女性が厳しく選ぶから、女性が経済力のある男性に集まる。一夫多妻制になると、女性がそこに集中するんですね。結婚できない男性ができるから、一夫一婦制ができたんです。

(知事) あれは男性を守るための制度だったのですね。

(内田) みんなに機会が順当にいくように。

(ジェフ) そうです。男性もみんな結婚できるようにするための制度だったんです。昔は女性が厳しく選んでいた。

■男性の家事育児への幅広い参加

(ジェフ) しかし、知事さんも私も「ベストファーザー in 関西賞」をいただいているんですよ。最初、事務局から電話がかかってきて、「ベストファーザー賞だ」って家族に言った時に、二人とも家族のリアクションは同じだったんですよ。「何で？」って。

(知事) それは仕方がないと思います。娘にすれば父親は僕しかいないんですから、ベストでもあるかもしれないですが、ワーストでもあるわけです。

(ジェフ) そうなんです。現状を知っているから。

(知事) 娘からすると、オンリーファーザーです。ですから、最近は大分付き合ってくれるようになりました。

(内田) やはり子育てなども、ハーモニーでなさっているのですか。

(ジェフ) 私はやはりアメリカで生まれ育ちましたから、アメリカでは男性の方が子育てに参加するというのは、戦後から当たり前という形になっていました。私の小さい頃からそうでしたから、結婚した時に、もちろん私はオムツを換えるとか、ミルクを与えるとか、オッパイは出ないですが、お風呂に入れるとか、こういう参加はしていたんです。だんだん子どもが大きくなってくるとますます、例えば家族で旅行したり、それから家庭の中で食事中にみんなで話をする、その時に、できるだけ子どもの意見が出るような形をとっていく。もちろん一緒に参加したいんですが、多くの男性は子育てに参加したいと思っても、時間的になかなか。先程、知事さんが言われたように、均等法で男性も育児休暇を取れるのですが、現実には取れないというのは、やはり社会的に「男性が働くんだ。その働きが子育てに参加すること、いわゆる経済面で支えていくんだ。」という、どこかそういう意識がまだ強いんじゃないかなと。

(知事) 僕は子育てが大好きなんですよ。帰った時には子どもにべったりになってしまうんですよ。ですから、確かにお風呂に入れるというのは、誰にも渡したくない仕事なんです。パートナーに、「もう一緒に入るのはやめなさい」と言われた時は本当に悲しかった。

たですね。なんだか、子育ての中の自分の一番大切な部分を奪われるみたいで。

(ジェフ) 一緒です。私も風呂が大好きだったんです。子どもは男3人だったので、4人で。私は妻からの言葉じゃなくて、中学になったら自然と一緒に入りたくないと言い出して一緒に入れなくなって。私は唯一、お母ちゃんの悪口が言える場所だったのに。子どもが「お父ちゃん、かわいそう」って言ってくれていたのがなくなったのは、寂しいですね。しかし、たぶん内田さんもお感じになったと思うんですが、子育てというのは楽しかった。

(内田) そうなんですね。

(ジェフ) 今、ウチは孫が4人なんです。今日も来ていますので、帰ったらまた遊ぶんですが、男性も男女共同参画社会というのが自分にとって非常に大事な課題なんです。でも、やはり男女共同参画社会という言葉を知ると、皆さん力が入りますが、そうではなくて、ちょっと笑いながら、ちょっと楽しみながらというのが非常に大切だと思うんです。最後に、男女共同参画社会に向けて、皆さんに対するメッセージをお二人からお聞きしたいのですが。

■男女共同参画社会の実現に向けて

(内田) はい、今日はすごく楽しくお話を聞かせていただいたりしながら、やはり先輩たちはすごいなと思いました。先程もお伝えしましたけれども、私はたまたま音楽なので、それぞれの音の一つ一つのバランスをとって、一つの弦では出せないたくさんのハーモニーや音楽のような関わりが、皆さんにもあったらいいなと思います。それから、私も改めて気づいたのは、やはり「地域」が、いろいろ大切なことを自然に生み出す単位なんだということ。これから私も自分の軸足である

地元を大切にしながら、でも、京都の外にも飛び出して行って、やはりそうやって外に出ていくと、かえって京都のことが見えてきたりしますし、いろいろな視点で京都、そして自分の地域を見つめながら、いろいろな方に支えていただきながら頑張っていけないといけないなと思いました。ありがとうございました。

(知事) やはり理解と行動というのが必要だなと思いました。昨日、目からうろこっていうんでしょうか、大変貴重な体験をしました。何かと申しますと、昨日、ここで人権フェスティバルが行われていたんですけれども、その時に、相手を思いやる体験をしましょうという様々なコーナーの中に妊婦さんの体験をしましょうというコーナーがあったんです。どういうことかと申しますと、お腹におもりを付けて、子どもをお腹に入れた状態を体験できるという。初めてその経験をしてビックリしました。正直言いまして、今までの自分だと、3キロぐらいの子供がお腹の中にあるんだなというぐらいに思っていたんですよ。たぶん男性っていうのはそう思っているんだと思うんですよね。ところが、実際は羊水も含めると、8キロぐらいあるんですね。8キロか9キロ。付けた瞬間に動けなくなるんですよ。「えー、ウチのパートナーはえらかったんだな！」と。私のパートナーは子どもを生んで、24年ぐらい経っているんですけど、そうだったのかというのが初めてわかりました。あれは本当に大変ですね。8キロだと、とんでもなく身体のバランスが狂ってしまい、私でさえひっくり返ります。ただ、京都府の男女共同参画監に聞いたら、「だんだん大きくなるから慣れるんです」と、事もなげに言ったんですけれども。

(ジェフ) いきなり8キロではないですからね。ただ、先程私も控え室でその話を聞いて

いたんですが、大変なのは重さではなくて、下が見えないという。

(知事) 重さも視界も全部です。とてもじゃないですが、僕はあれでは動けません。

(ジェフ) 今日は男性の方が結構参加されていることがすごく嬉しいですね。男女という言葉が最初に出てきて、女性だけがこの「あけぼのフェスティバル」に参加する時代ではなくなっていますね。

(知事) 男女平等というと、男も女もみんな一緒にみたいな感じですが、やはり全然違うんですね。それを理解しない限りは本当の意味での男女平等というのはできないんじゃないかと思っています。男女平等というと、みんな同じ行動をすることだという理解をされている面もあるんですけど、そうじゃないんだ、やはりそれぞれの違っているところを理解し合うことから始めないといけないんです。そうしないと本当の意味で、しっかりとハーモニーを作れる社会はできない。そのためには行動していかないといけない。先程言いましたように、育児休業の制度があっても、これを取らない限りは絶対ダメなんです。理解だけではいけない。その後に行動していかないといけない。その行動をどうやって作り出すか。これはやはり私たち京都府の役割ではないかと思っています。理解と行動の中で、男女共同参画社会のハーモニーを作っていくというのが、僕のメッセージです。

(内田) 育児休業でお休みを取られても、仕事も差し障りなく、いろいろなことができるんだという発見があるかもしれませんね。皆さん、お休みを取ってお仕事が滞ったりするのが心配で育児休暇を取られないのかなと思うのですが、やってみられたら意外と良い結果が出て、後からたくさん続けられるかもしれないですね。

(知事) そこもハーモニーだと思うんです。

やはり話し合っ、理解をして、行動をしていくということを積み重ねていくことが必要なのです。器があっても何も入れなかったらつまらないですよ。

(ジェフ) 皆さん、知事さんが最後に言われたように、「意識改革」、いわゆる考え方。それに伴う「行動」。この二つがやはり、男女共同参画社会を作っていくためには必要だ、と感じますし、皆さんもお感じになっていると思います。お昼からのワークショップでも皆さんはいろいろと学んだり、議論されるかと思っています。今日は、私たち3人をお招きいただきまして、本当にありがとうございました。